

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	豊田有

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
京都大学
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウム
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 12 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回は京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウムに参加した。生物科学部門と思想・芸術部門の2部門の講演とクロージングセッションでの講演者らの議論を拝聴した。</p> <p>私が今回のシンポジウムに参加して、とても印象深く記憶に残っている講演は、思想・芸術部門の近藤譲先生の講演、「現代音楽における自律的芸術作品の解体、又は、音楽言語の外在化」である。普段は純粋な芸術とは縁のない生活をしているが、この講演を聞いて、芸術に関する認識が大きく変わった。</p> <p>日常生活において芸術といえば、絵画や陶器などの「作品」、いわゆる制作物を思い浮かべるが、古くは芸術性とは「生産者の技術、能力、あるいはそうした知識」であったことを聞き、驚いた反面、非常に強く納得した。私のような一般人には、芸術というものはなかなか体感しがたいものであり、特に芸術作品を提示されて「これが芸術性の高い高貴な作品だ」などと言われても容易には理解できない。そうした作品につき値段に目を見張り、ただただ困惑するばかりである。ところがその値段は作品そのものについているのではなく、その作品を生み出した製作者の技術や能力、知識についている値段であるのだという認識に変わった瞬間、目の前にある芸術作品の見方が大きく変わるだろう。</p> <p>芸術とはある種の精神活動の産物であるがゆえに、見る側のものの見方ひとつで大きく価値観が異なる奇妙なものであり、それが胡散臭さを漂わせる最大の原因であると思っていた。特に抽象画や陶器製作物は、見た人の多くが「これなら自分でも製作できそうだ」という感想をもつ一方で、そんな誰にでも作れそうな作品にこれみよがしに貼り付けられている高額な値札を見ては「やはり芸術というものはよくわからないな」という結論に至る。そしてその「よくわからない」カオス度合いの強いものがより芸術性の高い作品であり、そういう意味の曖昧なものをありがたがるのが芸術作品の消費の形態だと思っていた。しかし近藤先生の講演のなかで、カオスな音楽というのが、なぜ「よくわからない」のかについて、構造と機能を軸に論理的に説明されていた点は、音楽に詳しくない私にとっても非常に理解しやすく、芸術的な音楽の鑑賞の視点を大きく変えるものであった。</p> <p>私は霊長類研究所の大学院生として日頃から霊長類学に親しんでいることもあり、午前の生物科学部門の講演も非常に興味深いものであったが、今回の京都賞シンポジウムでは普段なかなか関わりのない芸術分野の話聞くことができ、とても新鮮だった。文系学問不要論がにわか流行り始めている今、学問としての芸術を体現されている研究者の話聞く機会が設けられたことは有意義であったし、私達が偏見をもっている「芸術作品などは芸術家の自己陶酔の産物にすぎない」という誤解を解くきっかけにもなったと思う。</p>
6. その他 (特記事項など)